

等の利用者が中心になり、運動不足の解消や楽しめる競技を目的に、スプーンレース（ピンポン玉運び）、パンくい競争、血圧（尻圧）測定、綱引き等を行っている。平成14年より開催され、今年度は参加施設21ヶ所、参加者242名である。

もう1つは「メンタルヘルスネットワークin仙台・スポーツフェスティバル」。今年で14回を迎える。参加者470名、競技種目はソフトボール、バレーボール、ボッチャ、卓球、フットサルの5種目、種目ごとに審判をお願いし、一定の競技性を保っています。精神障害者は身体・知的に比べて出足が遅れていることもあって、自らが競技性を楽しんだり、技を磨くことが中心になっているのが現状である。作業所や社会復帰施設が増えており、その中にスポーツ好きな人がいれば地域の体育施設を借りてスポーツをする施設は確実に増えている。また、仙台市内のある施設（NPO法人・社会福祉法人）の取り組みとして、この施設利用者が若いこともあって、週1回スポーツを実施、種目もフットサル、ソフトボール、バレーボール、三角ベースボール、テニスと多種で参加者も30名以上で、今のところは施設の利用者、ボランティア、実習生が中心になっているが施設側では垣根は作っていないということで、地域住民も巻き込めれば理解も広がるのではと考えている。

別のNPO法人の作業所もスポーツ好きの利用者が多くボランティアを含めてスポーツを行うが地域の人を巻き込むにはいたっていない。作業所やグループホームの運営にあたっては町内会に加入し、町内会行事に参加して地域住民との交流（スポーツ）を通して地域への理解が広がるのではないかと、それには支援にあたっている人々の理解とサポートが必要である。

知的障害者を対象としたアダプテッド・スポーツの援助の進め方

スペシャリスト・アスリート・クラブ
池田 洋貞

1. はじめに

S・A・C（スペシャリスト・アスリート・クラブ）では、中学生以上の歩くことができる知的障害者を対象に、陸上競技、サッカー等のスポーツ活動を提供している。会員は130人を越え、実際の活動では、メンバーを能力別に3グループに分けて実施している。

Sグループ（スピードグループ）は重度障害を併せ持ち、歩行においても介助を必要としている方も多し。中には発達年齢が2歳未満の知的障害の方もいる。スピードグループのスポーツの目標は、「動きたい」「あそこへ行ってみよう」という人間としての根本的な知的要求を満たしてあげるもので、スタッフ、ボランティアは個々に1人または2人が着いて、競技場内の散策活動を中心に活動している。

Aグループ（アタックグループ）は普段運動不足になりがちな中度の知的障害者を対象としている。中には肥満、心臓病、喫煙が習慣化している者など、成人病になりつつある者もいる。アタックグループとしてのスポーツの目的は、運動不足の解消と健康維持のためのレクリエーション活動である。スタッフ、ボランティアの数は競技種目により異なるがアスリート5人に対し1人程度である。

Cグループ（チャレンジグループ）は比較的運動能力が高く（健常者の方達と比較するとやや劣る）軽度の知的障害者を対象としている。チャレンジグループのスポーツの目的は、地域社会の中で生きることであり、健常者と同じ競技種目に出場し、その意識を共有することにある。知的障害者に対してのアダプテッドスポーツの取り組み方

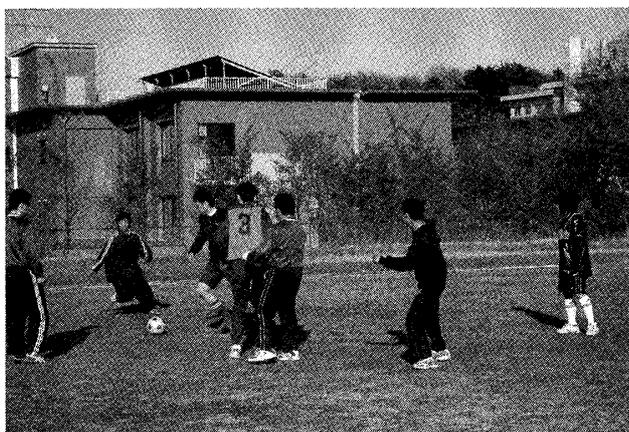
として、援助を行うスタッフ、ボランティアの対応の仕方をどのように進めるかが問題となる。知的障害者は概念形成、抽象的な思考・情報の操作が困難である。例えば、サッカーにおいて、個別のパス練習等の技能練習は比較的スムーズに進むが、多数でのパス練習やフォーメーションプレーは難しいものがある。特に自閉症を併せ持つ方は、他者との関わり自体が困難なため、プレー以前に人間関係の育成を行う必要がある。また、ダウン症の方は、声かけによる励ましや激励によって思った以上の能力を発揮することもある。技能上の援助はもちろんのこと、情意面における援助も必要とされる。

ここでは、チャレンジグループのメンバーを中心としたサッカー競技に対する援助について述べるものである。

2. サッカー競技に対する援助

サッカーチームを立ち上げたのは、第1回全国障害者スポーツ大会が宮城県で開催される2年前であった。大会参加に向けて、仙台市のチームを作るため、S・A・Cに声がかかったのである。

小中養護学校等でサッカーをしたことがあるというメンバーがすぐに集まった。しかし、競技としてのサッカー経験者は皆無であり、ボールを蹴ってゴールに入れたことがあるというレベルのメンバーがほとんどであった。ためしに試合を行うとフォーメーションもままならず、ほとんどの者がボールに集中し、残りはピッチ内で全く動かな



い状態であった。

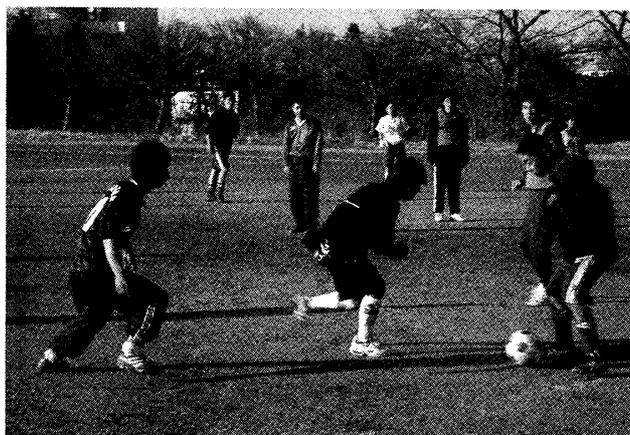
(全員でゴールを目指す段階：ゴルフサッカー)

まず、二人組でのパス練習から始めた。ボールをきちんと止めることができず、ダイレクトに蹴ったとき、ボールに勢いがあるだけで満足してしまう。そこで、①味方から受けたボールをきちんと止める。②ねらった相手に正確にパスを渡すことを目標とした。アスリート同士でパス練習を行うと、インサイド、アウトサイド等の正しいフォームが確立できないので、ペアの相手はボランティアが行うこととした。ボランティアが正確にパスを渡しながら、技術向上にあたった。もちろん個人の能力差は大きいのだが、空間認知能力に遅れのある者でも4年程の練習により、正確なパスができるようになった。



パス練習だけでは、意欲を喪失してしまうので、毎回ミニゲームを行った。ポジションを決定し、いつも定位置に戻って、極端な場合はそこから動かずにパスだけをまわしてシュートをねらわせた。ペアのボランティアは二人羽織の要領で、こぼしたパスをペアに渡したり、ペアのパスが届かないときボールを届けたりしながら、ゲーム中のパスワークができるように促した。(コンビネーションによりゴールを目指す段階：ビリヤードサッカー)

次の段階(グランドサッカー)は、3人チームにより、パス、フェイントを用いて、オフサイドポジションを意識させながらの試合運びである。



チームの内1人はボランティアが行い、ボランティアはオフサイドラインを声がけしながら、試合運びをリードするようにした。定着するのに2年程度を要した。ここまでの時点で、仙台市代表決定戦を勝ち抜き、全国大会（岐阜大会）へと駒を進めた。全国大会では、個人の基礎技術力の差はもとより、体力差、試合経験の少なさも手伝って、大量点を取られ完敗となった。

3. おわりに

知的障害者の方達は、幼い頃から他者と争うことを避けて過ごしてきた。争うことはいけないことという概念を捨てなければ、競技スポーツを勧めることは難しい。

また、学校生活においては、みんなが「良くできました」と、社会的に保護された生活場面が多く、負ける経験もほとんどなかった。しかし、実生活においては、何らかの他者との競争の中に生きなければならない。そういう意味で、今回の敗戦は彼らにとって大きな経験に成り得たと考える。

「身体障害者を対象とした実践の立場から」 —地域における障害者スポーツの普及活動—

東北福祉大学総合福祉学部教授
仙台市障害者スポーツ協会理事長
仙台市障害者スポーツ指導者協議会会長

阿部 一彦

第1回全国障害者スポーツ大会開催

宮城県内では県と仙台市の障害者スポーツ協会が主体的に活動し、1993年から身体障害者、知的障害者が共に参加する宮城県・仙台市障害者スポーツ大会が開催されてきた。このような背景のもとに身体障害者と知的障害者の統合スポーツ大会である第1回全国障害者スポーツ大会が2001年に開催された。この大会を契機に障害者スポーツ団体、障害当事者団体、社会福祉団体のみならず、地域の体協加盟競技団体やボランティア団体などとの間に密接なネットワークが形成された。大会を契機に障害者自身がスポーツを身近に感じるようになるなど、多くの資源が地域に築かれた。

身体障害者(障害者)にとってのスポーツの意義

障害や高齢によって身体を動かす機会が少なくなると、筋肉は衰え、骨密度が低下し、関節も拘縮し、血行不良、心肺機能も低下して、いわゆる廃用症候群におちいる危険性が大きい。そして、この延長上には、積極性が失われ、精神機能が低下することもある。このように考えると、障害があるからこそスポーツに取り組む必要がある。

ところで、多くの身体障害者は子供の頃から学校体育の授業では見学をした体験をもつ。また中途障害者も受障時の喪失感が大きく、スポーツを無縁と考えがちである。そのようなとき、何らかの機会によりスポーツ活動を体験し、思ったより